

〔狭山市を愛した文学者 その2〕

## 詩集「北入曾」の吉野弘先生

広沢一岐

現代詩を代表する詩人吉野弘先生は、いま市内入間川の慈眼寺で永遠の眠りについておられます。昭和47年(1972)秋、北入曾249番地に移ってこられた詩人は、平成19年(2007)静岡県へ転居なさるまでの35年間、狭山市民でした。

多くの国民に愛され、教科書にも作品が載る吉野先生は、大正15年(1926)山形県酒田市に生まれ、同市立商業学校を卒業、帝国石油に入社されています。戦後は労働運動に参加、その後病氣入院中に詩にめざめられました。詩誌『詩学』や『權』で活躍し、名声を高められたのです。

狭山市民となられてから発刊された詩集『北入曾』は、当市にとっても得がたい文芸資産です。前市長仲川幸成さんは、次のように書いています。(広報さやま：市長随想102号)

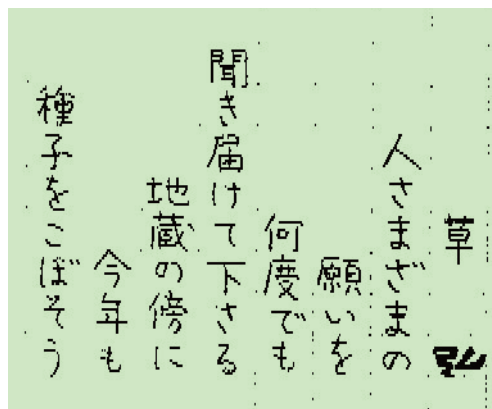
50年ほど前、彼は自宅の窓からいつも私の畑作業を眺めておりましたが、ある日、やぶきたの取り木(苗木の育成)作業を見に畑に来ました。(中略)後日、彼は一冊の詩集『北入曾』をくれました。その中には「井戸端園の若旦那が、或る日、私に話してくれました」からはじまる『茶の花おぼえがき』が載っており、この本の主作品はこの詩であると教えてくれました。(後略)

吉野先生は、詩ばかりでなく随筆の名手でもありました。数多く〈狭山市〉のことを書いておられます。また入間野中学校校歌の作詞や、入間公民館での文学講座に力を尽くして下さいました。『文芸さやま』の選者も務めて頂きました。

昭和61年(1986)8月、当時狭山市史戦後編を執筆中だった私は、いろいろとお話を聞かせて頂いております。あの名作『夕焼け』について「やさしい娘さんが乗っていたのは西武線ですか?」と質問すると、「西武線ではないんですが…」と何故か同情にたえないという顔をなさいました。その眼鏡の奥の目が思い浮かびます。

平成26年(2014)1月、先生は彼の地で87年の生涯を閉じられました。そして父末太郎氏の眠る狭山市のお墓へ戻ってこられました。

狭山市に確かな足跡を残された詩人をしのび、有志の方々が一昨年11月「吉野弘遺作展」を開きました。会場の市民交流センターへ、市外からも多くのファンが足を運んで下さいました。展示物を見ながら私の頭に浮かんだのは、あの有名な「祝婚歌」ではなく、地蔵さまの足もとに倚りかかる人形の老いを哀愁漂う言葉で紡いだ「人形譚」でした。



吉野弘 自筆原稿

## 第19回 桜まつり 実行委員会 立ち上げ

4月7日(土)・8日(日)には満開を期待

稲荷山公園内特設ステージで行われる“桜まつり”、11月17日(金)中央公民館にて、観光協会と文団連関係者が出席して、実行委員会を開き、日程と役員を選出。出演団体も早々に揃った。(土曜日のみ観光協会の公募あり)

昨年は桜も咲き始め、寒く天候にも恵まれなかったが、今年は満開も期待出来そう。

1月31日(水)に実行委員会を開き、ポスター、チラシ他細部を詰めて行く。(高沢正夫)

実行委員長 中村伶華 (狭山市三曲連盟)  
実行副委員長 金子信之 (狭山市観光協会)  
実行副委員長 南雲香澄 (狭山市太極拳クラブ)  
会計 五十嵐牧子 (文団連選任理事)



第18回 桜まつり光景